

●木工事

千葉県内に残る古民家に使われてきた木材は、土台には栗やケヤキ、柱には杉、梁には赤松や黒松が使われていることが多い。それらの当初材の腐朽、損傷、新建材による不具合など伝統工法を基本に工事を推進する。木工事というまでもなく、大工仕事は古民家のみならず、木造住宅の品質の要である。大工の作った下地によって、左官職人が塗る漆喰も、建具職人がつくる木製建具も施工の品質を左右する。基本事項を順守し、工事内容に適した大工職人により施工を進めることとする。

《基本事項の概要》

- ①補修や埋め木をする場合にはできる限り、同種の材を使用する。
- ②損傷や腐れのある柱は交換もしくは根継を行う。
- ③継ぎ手と仕口については伝統的な施工法を採用して、古民家のさらなる耐久性を保持するのに問題のないようにする。
- ④継ぎ手や仕口のほか、造作工事や建具、仕上げ等自然素材を基本として活用する。
- ⑤木材は補修部位、木材の性質、自然乾燥材、耐久性など部位に応じた選択を行う。
- ⑥点検と維持管理が容易な改修とする
- ⑦建物周り雨水排水、土中水などの影響を受けやすい部位は耐朽性の高い材種を使う。
- ⑧工業製品の断熱材は、床・天井・壁に住宅性能表示における等級3（新省エネルギー基準相当）以上の性能をクリアするもので施工する。

●壁

古民家は柱が見える真壁、もしくは柱・間柱が見えない大壁工法のいずれかで施工されている。したがって再生にあたっては真壁改修と柱を壁で隠す大壁改修の施工法に分かれる。現代の工法を取り入れるには、大壁にすれば壁耐力をとることも容易であり、新たな壁をつくる場合、断熱材を入れたりできる利点もある。

壁仕様は湿式の「土もの」と乾式の「板もの」にわかれる。

- ①湿式工法：伝統工法と現代工法の2種がある

漆喰塗が施工しやすくかつ美しく仕上げるように配慮することが下地と造作をするうえで大切である。また、建具など溝つきや木枠の取り付けなど建具職人との調整も大事になる。大工の技量と職人同士の意思疎通がいい建物をつくる基本といえる。

外壁 杉板張り

古民家では、外壁に杉板を使用してきた。横張りの「ささらこ」が多いが、縦張りしてモダンにしたのが写真である。塗装ではなく、木材保護の効果があるウッドロングエコが塗られた。木材の経年変化のような色彩変化を起こすため、古民家の既存部分になじむ。

●床

床下地は大引を910mmピッチで配置して、根太を300mmピッチで留めつける。

●天井

下地は910×450mmのピッチで施工する。その下に、石膏ボードを張る。

